

バーチャルマネジメント研究所 50回記念

『経営学はビジネスの役に立つのか』

今回はある本がきっかけで、掲題のコラムを書こうと思い立ちました。奇しくもその本は、経営学研究を指導していただいた恩師である大滝精一先生(東北大学大学院経済学研究科長)の還暦お祝い会に出席するため、年の瀬の仙台へ赴いた往復の新幹線車中で読んだものでした。

■世界の経営学者はいま何を考えているのか

『世界の経営学者はいま何を考えているのか』というタイトルを最初に見たとき、「海外“では”〇〇〇が常識」と喧伝する、いわゆる“出羽守(“でわ”のかみ)”タイプの威圧本、ないしは黒船襲来という外圧を利用した国内経営学業界への警鐘本の類かと、たいへん失礼なことながら勘違いし、すぐには手に取らずにいました。

既に、著者自身が日経ビジネスオンラインで連載を開始し、またネット上で書評も出ているようなので、本書の内容についての理解が世の中で進んでいるかも知れません。よって、その内容について、ここでは詳しく述べません。簡単に紹介すると、「日本で一般的にはあまり知られていない米国などの経営学研究において、その先端ではおもに何が議論されているのかを、可能な限り平易に解説しようとするもの」であるといえます。

一方で、日本では実務界を中心に親しまれているドラッカーを米国経営学者は読まない(引用しない)、ハーバードビジネスレビューは学術誌ではない、といった本書第1章における著者の見解に対して、国内メディアが注目し、評判を集めています。

しかし、これらのある種のバイアスが掛かった寸評ほどには本書の内容は煽動的ではなく、経営学や経済学を研究としてかじったことがある者にとっては、特に違和感のない常識的な話で本書の大部分は占められていると感じるはずです。

むしろ、「米国と日本の経営学におけるアプローチの違い」を、あらためて浮き彫りにしている点に注目すべきでしょう。著者も指摘するように、米国の経営学はひたすら科学となることを目指しており、日本のようにケーススタディ中心のアプローチとは対照的であるという現状については、概ねそのとおりでと思います。

■実践と理論のバランス

経済学と経営学を中途半端に修めた私などは、「経済学は300年前の熱力学を模した“なんちゃって科学だ」とか、「経営学はただの漫才ではないか」という心境に至っていたことが過去にはあり、学問として捉える価値があるのかから疑問に感じた時期もあります。

しかし、その科学でさえも、たとえば普遍的な法則が宇宙に存在するという前提で物理学は存在していますが、その前提となる仮説を実証することは現実には困難です。こう考えると気が楽になり、以降はビジネスにおいて大きく道はずさないために、概ね正しいであろうという「導き」を研究成果に求めたいと考えるようになりました。

現場を駆けずりまわり、帰納的に解を探す必要性はわかっている、場当たりにことにあたるだけでは、絶望的な気分に至ることもあります。ケインズがいうところの「アニマルスピリッツ(野心的意欲)」だけではたいへんです。しかし、それを回避するためにオフィスにこもり、机上の空論よろしく演繹的な議論に拘泥していると、「失敗の本質」のように日本軍の轍を踏む可能性が高まります。

したがって、演繹的に導かれた理論を参考にしつつも、現場では帰納的に思考するというスタイルのほうが、N・タレブがいうところの「まぐれあたり」に任せるよりも、道を踏み外すリスクが緩和されるのではないかと考えるようになりました。

本書でも、企業が組織として新しい知を求める活動である「知の探索」と、既存の知識を改良していく「知の深化」、このバランスを保つ「両利きの経営」がイノベーションを促すうえで重要であることを指摘しています。企業組織が「知の探索」を怠り、本質的には「知の深化」に傾斜しがちであることは宿命で、これは演繹的思考に囚われることと通底していると思われます。

■役に立つ研究成果を発見し、正しく利用すること

日本の経営学が本書で指摘されているような、いわゆる「ガラパゴス状態」にあるのであれば、それは利用する側、つまりビジネス界に需要がないことが原因かも知れません。あるいは、見るべきものが多くないと考えられ、結果的にあまり重視されていないのかも知れません。いずれにしても、日本でドラッカーやビジョナリー・カンパニーを好んでいるのは、どちらかという経営学者よりも実務家ではないかというのが個人的な実感です。

「電力の鬼」と呼ばれ、電力中央研究所を創設した松永安左エ門は、戦後日本の産業復興に大きな軌跡を残した科学的経営者として高い評価を得ています。翁のような科学的経営者を志向するならば、理論と実証分析に裏打ちされた知のフィードバックを利用せずにはおれません。

どのような学問領域でも、「役に立つ研究成果を発見し、正しく利用することができる」というユーザー側の資質が問われることは当然です。この点については経営学も例外ではありません。よって、「経営学はビジネスの役に立つのか」という冒頭の命題に対しては、「真なり」と考えるべきですし、ユーザー側にも相応の知性が必要であると自覚するべきだと思います。

参考文献

- ー入山章栄『世界の経営学者はいま何を考えているのか』英治出版。
- ー入山章栄『世界で「知の競争」に勝つには、ドラッカーを読んでいるヒマはない』日経ビジネスオンライン。
- ーG・アカロフ、R・シラー『アニマルスピリット』東洋経済新報社。
- ー野中郁次郎他『失敗の本質 日本軍の組織論的研究』ダイヤモンド社。
- ーN・タレブ『まぐれ 投資家はなぜ、運を實力と勘違いするのか』ダイヤモンド社。
- ー橘川武郎『松永安左エ門 生きているうち鬼といわれても』ミネルヴァ書房。

◇経営学博士 巽 直樹◇

中央大学法学部卒。東洋信託銀行(現、三菱UFJ信託銀行)国際資金為替部、香港支店等で外為ディーラー、デリバティブトレーダー等を、東北電力企画部、営業部、グループ事業推進部等でパワートレーダー、統合リスクマネジメント・マクロ経済調査等のリサーチャー、海外事業プロジェクトマネージャー等を経験する一方、学習院大学経済学部特別客員教授(専任)、ベンチャー企業の役員等を歴任。東北大学大学院経済学研究科博士課程修了、博士(経営学)。

◇株式会社インソース◇

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 1-19-1 神田橋パークビル 5 階

TEL:03-5259-0070 FAX:03-5259-0075 <http://www.insource.co.jp/>